

待ち望むことの大切さ

「しかし、主を待ち望む者は、新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることが出来る。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」

(イザヤ書 40 章 31 節)

いわゆる“教会暦”では、今年 2023 年は本日(12/3)よりクリスマスを待ち望む「アドヴェント(待降節)」の期間に入るようです。厳密に言えば、主イエス・キリストは約二千年前に既に降誕(初臨)されていますので、待ち望むのは御子の降誕を覚える時ということになるかと思えます。ですから、教会によっては、この時期、再臨待望を強調したりするところもあるようです。

いずれにしましても、私たちクリスチャンは様々な場面において、それこそ事ある毎に主をこそ待ち望みたいと思えます。主の来臨、神の出る幕を待ち望みましょう。そうして、たとえ肉体的には衰えたとしても、霊的には「新しく力を得、鷲のように翼をかって上る」ことをさせていただき、「走ってもたゆまず、歩いても疲れない」信仰的持久力を兼ね備えたいと思えます。

ところで、よく言われることなのですが、お年を召してもなお若さを保つためには、“キョウヨウ”と“キョウイク”が必要だということです。ただ、“キョウヨウ”と“キョウイク”と言っても、若い人に必要な「教養」と「教育」のことではありません。“キョウヨウ”とは、「今日、用がある」ということであり、“キョウイク”とは「今日、行く所がある」ということなのだそうです。

今日、用がある！…すなわち、今日(毎日)、主を待ち望み、主とお会いするデボーション(個人的な礼拝)をする用があります。そして、今日、行く所がある！…すなわち、今日(日曜日)、主を待ち望み、主を礼拝するために、また、主にある兄弟姉妹と交わりをするためにキリストの身体なる“教会”という大切な行く所があるのです。

十字架上の七つの言葉

「十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私
たちには、神の力です。」 (コリント人への手紙第一 1章 18節)

主イエスが十字架に着けられたのは午前九時(マルコ 15:25)で、十字架
上で主イエスが息を引き取ったのが午後三時(ルカ 23:44)でした。その六時間
の間に、主イエスは十字架上で少なくとも以下の七つの言葉を発したと考
えられています。

なお、そんな十字架上の七つの言葉は、フランツ・ヨーゼフ・ハイドンや
ハインリヒ・シュッツらによって芸術作品(管弦楽曲)にされています。ただ、
今回は、聖書に記された言葉のみをしっかりと味わってみましょう。主イエ
ス・キリストは一体、どのような思いで、これらの言葉を発せられたのでし
ょうか？

<第一の言葉> 「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているの
か自分でわからないのです。」 (ルカ 23:34)

<第二の言葉> 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたし
とともにパラダイスにいます。」 (ルカ 23:43)

<第三の言葉> [主イエスから母マリヤへ] 「女の方。そこに、あなたの息
子がいます。」 [主イエスから弟子ヨハネへ] 「そこに、あなたの母がいます。」
(ヨハネ 19:26～27)

<第四の言葉> 「エリ、エリ、レマ、サバクタニ(わが神、わが神、どうし
てわたしをお見捨てになったのですか)。」 (マタイ 27:46 /マルコ 15:34)

<第五の言葉> 「わたしは渇く」 (ヨハネ 19:28)

<第六の言葉> 「完了した」 (ヨハネ 19:30)

<第七の言葉> 「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」 (ルカ 23:46)

良き港があるからこそ・・・

「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」

(ピリピ人への手紙3章20節)

このところ御茶の水で共に礼拝を守ってきました兄弟姉妹が天に召されることが相次ぎ、寂しく感じていらっしゃる方々も少なくないのではないのでしょうか？私自身もその一人です。と同時に、私たちはそのような兄弟姉妹と、いつか必ず、天の御国で再会できるという希望があることも決して忘れてはならないと思います。

ところで、キリスト教信仰の大切な要素の一つに“死は終わりではない”というポイントがあります。ある意味、この地上生涯の終わりである死は、天の御国における永遠の命の始まりでもあるのです。終わりは始まり、終着駅は始発駅なのです。そのあとがあるのです。

そして、私たちキリスト者は、そんな天の御国の国籍を既に有し、永遠の命を既にいただいていることを日々実感したいと思います。そんな救いの確信こそ、究極の“終活”と言えるのではないのでしょうか？言うなれば、私たちは、自らの罪を告白し、主イエス・キリストの十字架の贖いによって与えられる救いにあずかるべくバプテスマされ、キリスト者、クリスチャンとなった時点で、究極の“終活”を完了し、救いの<内定>をいただいたようなものなのではないかと思うのです。

“終活”ではなく、“就活”を終えた大学生が、ホッとして、また、それなりの余裕のうちにボランティア活動等に精を出すのとはほぼ同じように、私たちキリスト者も、天に国籍をいただき、救いが<内定>、いや<<約束>>された者として、キリスト者としての為すべきことを、喜んで、そして、大胆に為して参りたいと思います。「良き港があるからこそ、人は冒険的な航海に出ることができる」のですから。ハレルヤ！

夜から始まる物語 ～夜があっても朝は来る！～

「・・・こうして夕があり、朝があった。・・・」 (創世記1章5節)

このところ、めっきり日の入り、夕暮れが早くなりました。夕方五時を過ぎますと、一気に暗くなってきます。そんな暗闇の早い訪れに寂しさを覚えるのは、はたして私だけでしょうか？

ところで、聖書におきましては、往々にして夕方や夜に、その出来事としての物語が始まっているのではないのでしょうか？たとえば、湖上の嵐を主イエスが鎮めたという奇跡は、こんな書き出しで始まります。「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸に渡ろう。』と言われた。」(マルコの福音書4章35節)

聖書の地理的な舞台であるパレスチナは、基本的には乾燥地帯であり、昼間とても暑くなり、夜に気温が下がる傾向があります。そういう中で、より過ごし易い夕暮れや夜にこそ、様々なことが動き出すということもあるのかもしれません。

ところで、聖書的一日観は、「朝から始まって夜に終わる」という一般的な一日観とは逆で、「夜から始まって朝に続く」というものです。そして、その根拠が上掲のみことばに示されている「・・・こうして夕があり、朝があった。・・・」という記述だと言われております。ちなみに、いわゆる“クリスマス・イヴ”という考え方もそんな聖書的一日観の賜物であり、それは「前夜」ではなく、むしろ「今夜」なのです。

以前、ユダヤ人があの度重なる迫害の歴史、ホロコーストを乗り越えて来られた背景には、まさに「夜から始まって朝に続く」という一日観があるのだ、というようなことを聞いたことがあります。すなわち、夜があっても朝は来る、絶望の夜があっても必ず希望の朝(あした)はやって来る！ということなのではないでしょうか？

〈いつもの通り〉や〈当たり前〉を大切に！

「それからイエスは出て、いつものようにオリーブ山に行かれ、弟子たちも従った。いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、『誘惑に陥らないように祈っていなさい。』と言われた。」（ルカの福音書 22 章 39～40 節）

上掲の聖句は、いわゆる“ゲッセマネの祈り”の場面の冒頭部分になります。私たちはともすると、この主イエスの祈りを一回限りの特別な祈りと考えがちですが、ある意味、“ゲッセマネの祈り”は、「いつものように」「いつも場所」で行なわれた祈りの中の一つでした。ある意味、主はそんな祈りの中で、「この杯をわたしから取りのけてください」という消極的・人間的な姿勢から「わたしの願いではなく、みこころの通りにしてください」という信仰的で平安な姿勢へと変えられたのです。

このような意味において、私たちは、毎週の礼拝とか、毎日のディボーションというようなルーティーン(=習慣化)を大切にしたいと思います。ルーティーンは、必ずしも単調な繰り返しではなく、習慣化によってミスや失念を減らし、生産性や効率を高めると言われています。信仰の世界においても、そんなルーティーンは有意義なのではないでしょうか？何よりも、主イエスがそうしておられるのです。

また、最近読みました本に、次のようなことが書かれておりました。すなわち、人生の最期を迎えた人が決まって欲するのは、当たり前のことがしたいということだということです。「うちに帰りたい」、「自分の口で食べたい」、「歩いてトイレに行きたい」、「朝、ひとりで起きたい」などなど。

今、私たちは、当たり前のことに感謝したいと思います。オンラインの画面を通してではなく、教会の礼拝に行くことができる。そこで自分のために祈り、誰かのためにとりなしの祈りができる。・・・祈りは、クリスチャンの霊的な“呼吸”です！

教会のリフォームを！ ～工事中の教会として～

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

(ローマ人への手紙 12 章 1～2 節)

今週の火曜日、10月31日は、「宗教改革記念日」です。今から506年前のこの日、後の宗教改革者マルチン・ルターは、ヴィッテンベルク城内の教会の門扉にいわゆる「九十五ヶ条の論題」を貼り付け、そこから宗教改革が始まったとされています。

ちなみに、宗教改革のことを英語で“The Reformation”と表記します。この英語表記については少なからず議論もあるようですが、いわゆる「リフォーム」と関係がある言葉です。長年住み慣れた家が老朽化した際、部分的に家を改築することです。

ある意味、「呼び出された者たち」を意味する“エクレシア”としての教会も、そのようなリフォーム、(改築というよりは)改革が必要なのではないのでしょうか？歴史的に観ても、教会はそのようなリフォームをし続けてきているように思います。見方によっては、私たち“キリストの教会”の「聖書復帰運動(The Restoration Movement)」＝ストーン・キャンベル運動も、その一つなのかもしれません。

ところで、コロナ禍以降の激変する世の中においても、私たちは神のみこころを求めて、引き続き、教会のリフォームをし続けていく必要があるのではないのでしょうか？そして、私たち“キリストの教会”は謙虚に、今なお「工事中の教会」であることを忘れてはならないと思います。完成したと思っはリフォーム工事はできませんから。

究極の終活 ～墓地訪問に寄せて～

「イエスは言われた。わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」 (ヨハネの福音書 11 章 25 節)

本日(10月22日)は礼拝後に、教会墓地(相模メモリアルパーク内)を訪問します。年に一度の「墓地訪問」です。

ところで、なぜ、私たちは墓地を訪問するのでしょうか?・・・もちろん、先に天に召された方々を偲ぶためでしょう。あるいは、将来、自分の遺骨が埋葬される場所の確認もあるかもしれません。もしかしたら、風光明媚な場所ですので、ちょっとしたピクニック気分の方もいらっしゃるかもしれません。※ちなみに、欧米の墓地は公園のような場所を兼ねており、そういう目的で訪れる方々も少なくありません。

ただ、私は思いますに、私たちキリスト者は、上述の理由に加えて、お墓の指し示すところに目を留めるためにこそ墓地訪問をしたいのです。私たち御茶の水キリストの教会の墓石には、上記の聖句の一部が文語訳聖書で、こう刻まれています。「我は復活なり、生命なり」と。

キリスト者にとっては、死は決して終わりではありません。「終着駅は始発駅」であり、この地上生涯の終わり・終着駅である死は、永遠の命への始まり・始発駅なのです。私たちキリスト者は、墓地そのものに目を留めるためではなく、むしろ、墓地の指し示すところ、すなわち、死のその先、つまり、復活の命、永遠の命に目を留めるためにこそ、墓地を訪問すべきなのではないでしょうか?

終末に向けての活動、いわゆる「終活」が言われ出して、久しくなります。お墓の用意、葬儀の準備、遺産の整理などなど。しかしながら、真の終活、究極の終活は、死のその後への備えであり、確信なのではないでしょうか?

問題の山にではなく、山をも動かす神に、目を！

「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。」 (詩篇 121 篇 1～2 節)

いよいよ行楽の秋、スポーツの秋の到来です。もしかしたら、これからの時期、紅葉を求めて登山に出かけられる方もいらっしゃるかもしれません。

ところで、上掲のみことばにも「山」が出て参りますが、その「山」は、この詩人の前に立ちはだかる様々な問題の「山」を象徴しているのではないのでしょうか？この「山」が原語ヘブライ語では複数形〔へ〕へ・ハリーム)であることも、まさに“問題山積”というようなイメージを浮かばせます。そして、そんな中、詩人は一節の後半で、こう自問しています。「私の助けは、どこから来るのだろうか」。・・・こんなに問題山積で、一体、私の救い・助けは、どこから来るのだろうか？と。

しかしながら、その後、程なくして、彼は思い至っているかのようです。それが二節です。「私の助けは、天地を造られた主から来る！」。

これは私の想像ですが、おそらく詩人は、斜め 45 度ぐらいの方向に目を上げて問題を象徴する「山(々)」を見上げました。ため息が聞こえてきそうです。しかし、次の瞬間、詩人は、あのどん底にいた放蕩息子の如くにはっと我に返ったかのように、ふと思い至って、その視線をさらに上へ上げ、ほぼ 90 度の真上、すなわち、天を見上げて確信したのではないのでしょうか？・・・そうだ！「私の助けは、天地を造られた主から来る」のだ！と。

「信仰は、問題の山を見ることによってではなく、神を見上げることによってもたらされる！」と言われます。ぜひ、山積する問題から視線を上げて、神をこそ見上げていきましょう。10 人の斥候のようにではなく、あのヨシユアやカレブのように！

神様のトンカチ (God's Hammer)

「たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを、喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」

(詩篇 51 篇 16～17 節)

私が子供の頃、怒られることを「雷が落ちる」と言いました。子供ながらに怒られることは、辛いことですし、嫌なことですし、恐怖さえ感じたものです。でも、何か悪いことをして、なかなか怒られないと、逆に中途半端な気持ちになったり、一刻も早く「雷が落ちる」のを待っている自分に気付くことがあったことを思い出します。そして、「雷が落ち」ますと、何かほっとして、先に進めるのです。

私たちが、順風満帆ゆえに有頂天になって、小さなバベルの塔を築いたり、小さな神様になってしまう時、神様は私たちに「雷を落とす」かもしれません。それは、神の裁きというよりは、私たちが砕かれるという経験であり、私たちに大切な気付きを与えるものなのではないでしょうか？

実は、この“砕かれる”という経験は、極めて尊い経験なのです。ある意味、もし、バベルの塔の野望が打ち砕かれていなかったとしたら、人類は一体、どうなっていたのでしょうか？・・・私たちはしばしば「神様のトンカチ」で“砕かれる”ことによって、謙虚にさせられ、自分を神とせず、神をこそ神とし、正しい方向へと歩ませていただくことができるのではないのでしょうか？

そして、この“砕かれる”という経験は、必ずしも、私たちが小さなバベルの塔を築いてしまう時にだけ、させられるものではありません。ある意味、神様が私たちをより大きく用いようとされる場合にも、そうされることがあるのです。なぜならば、神様はそんな砕かれた魂をこそ求めておられ、貴くお用いになられるからです。

神無月にもインマヌエル！

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。・・・」(イザヤ書41章10節)
「・・・見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」
(マタイの福音書28章20節後半)

ようやく朝夕の涼しさに秋らしさを感じ始めていましたところ、なんともう10月になってしまいました!? ちなみに、10月は旧称で「神無月(かんなづき)」。

この表現の語源に関する最も有力な説としては、「神の月」という意味での「神な月」がその語源のようです。ちなみに、梅雨時期の6月が「水無月」と言われるのも、同じように「水の月」＝「水な月」からだそうです。

ところで、平安期以降に出雲大社の御師が広めたとされる語源俗説では、次のように伝えられております。すなわち、この時期(10月)に、ほぼ全ての神々が出雲(大社)に集まって翌年のことについて会議をするために、出雲以外では神々が留守にするので「神がいない月」という意味で「神無月」であると。なお、出雲だけは10月を「神在月(かみありづき)」と言うそうです。

それはさておき、私たちが信じる神様は、(三位一体の)唯一の神であり、一時的に“不在”になることは決してありません。神の言葉である聖書には度々、常に私たちと共に居て下さることが述べられています。上掲のみことば等にある通りです。

あの湖上の嵐(⇒マルコ4章35～41節)の際、弟子たちの乗った舟に同船された主イエスのように、主なる神は「あなた」や「私」という舟にも常に同船していて下さるのです。そして、時に応じて「嵐」に象徴される様々な心配や不安を抑えて下さり、人生という航海の「嵐」を、平安に満たされた「大なぎ」へと変えて下さるのです！

一人は皆のために、皆は一人のために！

「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」

(ローマ人への手紙 12 章 4～5 節)

私たち御茶の水キリストの教会の今年度、2023 年度の年間テーマは、上掲の聖句を拠り所とする「キリストの身体なる教会」です。そんな私たちの教会には、一人として不要な人はおりません。まさに、そこに属する一人一人は、キリストを頭とする一つの身体として互いに繋がっており、それぞれは大切な肢体(部分)なのです。

今、くしくもフランスでラグビーの W 杯(ワールドカップ)が行なわれていますが、そんなラグビーのスポーツ・モットーとも言うべきものが「一人は皆のために、皆は一人のために(One for All, All for One)！」です。このモットーはある意味、教会と私たち教会員の関係にも当てはまるのではないのでしょうか？・・・「あなたという一人は教会のために、教会はあなたという一人のために」存在し得るのです。

羊飼いである主イエス・キリストがたった一匹の迷子の小羊であるあなたや私を捜し求めて下さったように、私たち=教会も一人の存在を大切にしていきたいと思います。と同時に、私たち教会員一人一人もそれぞれ、「キリストの身体なる教会」のためにでき得ることを喜んで参りたいと思います。

かつて JFK こと、ジョン・F・ケネディ米国大統領は、その就任演説の中でアメリカ国民に向けて、次のように語り掛けました。「アメリカがあなたに何をしてくれるか[だけ]を問うのではなく、あなたがた自身がアメリカのために何ができるかを[も]問うて欲しい」と。・・・本日(9/24)の教会全体会では、“アメリカ”の部分“教会”に置き換えて、この問いをそれぞれ各自問自答してみたいと思います。

もう年だから、と言うな！

「すると、主は私に言われた。『まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。』」

(エレミヤ書1章7節)

このレッスンは、先日9月12日付の『今日の力』のメッセージ「もう年だからということはない」とその聖書朗読箇所・出エジプト記7章7節「彼らがパロに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。」に呼応して書いています。ちなみに、そのメッセージの中で、筆者はこう述べています。「年齢に関わらず、私たちは神の御国のためにお役に立てるのです。電話をかけたり、カードを送ったり、何より、祈ることができるのです。」と。これを読んだ時、作者不詳の「最上のわざ」という下記の詩を思い浮かべた方も少なくないのではないのでしょうか？

「この世の最上のわざは何？楽しい心で年をとり、働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、失望しそうな時に希望し、従順に、平静に、おのれの十字架を担う。若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見ても妬まず、人の為に働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱ってもはや人の為に役立たずとも、親切で柔和であること。老いの重荷は神の賜物。古びた心に、これで最後の磨きをかける。まことのふるさとへ行く為に。おのれをこの世に繋ぐ鎖を少しずつ外していくのは、真にえらい仕事。こうして何もできなくなれば、それを謙遜に承諾するのだ。神は最後に一番良い仕事を残して下さる。それは祈りだ。手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。愛する全ての人の上に神の恵みを求めるために。全てをなし終えたら、臨終の床に神の声を聴くだろう。「来よ、我が友よ、我、汝を見捨てじ」と。」 ↓(ヨシュア記13:1)

「あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。」

シン青年の方々へ！

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわざの日が来ないうちに、また、『何の喜びもない。』と言う年月が近づく前に。」

(伝道者の書 12 章 1 節)

いよいよ今週末から、今年で 10 周年の節目を迎える「キリストの教会新・青年の集い」が始まります。教会の未来を担う青年たちの学びと交わりが豊かなものになりますよう、共に祈りたいと思います。

ちなみに、いわゆる「敬老の日」を含むこの時期に、くしくも若者たちの集いが行なわれることに、違和感よりも、むしろ、特別な意義を感じます。それはすなわち、年老いた者もある意味、青年たり得るのだ、ということではないでしょうか？

実業家で詩人のサミュエル・ウルマンの「青春」という詩にかくあります。・・・「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を云う。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな手足ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、燃える情熱を指す。 / 青春とは人生の深い泉の清新さを云う。青春とは臆病さを退ける勇気、安きにつく気持を振り捨てる冒険心を意味する。 / 時には 20 歳の青年よりも 60 歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。・・・」

上掲のみことばは、若い人へのみことばだと決めつけられる高齢の方がおられますが、そんなことはありません。「あなたの若い日に」とは、何歳でも、あなたが今から最も若い時、つまり、少しでも早い時期にという意味です。

たとえ高齢に達していても、これからの貴方にとっては、“今”が最も若いと言えるのではないですか？「今日という日は、あなたのこれからの人生の最初の日である」のです。いくつになっても信仰を燃え立たすなら、貴方はシン(=信/真/心)青年です！

困難な時こそ、遠くを見よう！ ～終着駅は始発駅～

「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」

(ピリピ人への手紙3章20節)

いよいよ9月に入り、夏休みを終えた子供たちが学校に戻って行きました。ただ、子供たちによっては、今、一番、困難な時期を迎えているかもしれません。学校に行くこと自体が苦痛であったりします。いじめが原因しているかもしれませんし、共同生活が苦手な場合もあるかと思えます。なんと命を絶つことまで考えてしまうことさえあります。夏休みが終わり、新学期が始まる9月1日は、子供の自死の特異日とまで言われております。ぜひ、そんな子供たちのために、お祈り下さい！

夏休みは終わっても、人生が終わる訳ではありません。「終着駅は始発駅」、終わりは始まりでもあるのです。神様は必ず、不安や絶望の先に“そのあと”を備えていて下さることを覚えたいと思います。そこには人知を越えた平安や希望があるのです。

この夏、あのクリスチャン医師・日野原重明先生の最後の著書『生きていくあなたへ～105歳 どうしても残したかった言葉～』を読みました。その中に、心に残る以下のような言葉が紹介されていました。

「困難にぶつかった時こそ、遠くを見なさい！」

人生には確かに困難があります。しかしながら、そんな困難にぶつかった時、私たちはその困難にのみ目を留めるのではなく、祈りの中で、もっと遠く、すなわち、その先、その向こう側をこそ見たいものです。なぜなら、そこには私たちを愛して止まない神様がおり、そんな神様が私たちのために用意した“脱出の道”があるからです。

“キリストの教会”という群れの特徴（その4）

「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識との一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。」

（エペソ人への手紙4章13節）

私たち“キリストの教会”の目指すべきは、歴史的な意味での「キリストの教会」（いわゆる聖書復帰運動の結果）ではなく、むしろ、聖書に示された、あるべき教会なのではないでしょうか？もちろん、それは教派・宗派でもなければ、ストーン＝キャンベル主義でもありません。言うなれば、“キリストの（ような）教会”なのです。

そして、私たちはまだその道半ばにいますのであり、ある意味「工事中」の教会であるということを謙虚に受け止めたいと思います。そして、決して諦めずに、“キリストの（ような）教会”をこそ、目指していきましょう。

ところで、しばらく前のことになりますが、メキシコシティで分類不明の謎の両生類、名付けてアホートルが発見されました。各国の研究者たちは現地に駆け付け、調査しましたが、結論には至りません。そこで研究者たちはそれらの個体をそれぞれの国に持ち帰り、観賞池などで観察を続けることにしました。すると、ある国の個体が、その後、さらに変態・成長し、なんとメキシコオオサンショウウオになったというのです。環境のためか、幼生状態でその一生を送っていたアホートルは、別の環境に置かれた際に、適切に成長したという訳です。

ぜひ、私たちも、いつまでも幼生状態や現状維持に留まることなく、主にあって霊的に成長させていただき、「信仰の一致と神の御子に関する知識との一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達」したいものです！

“キリストの教会”という群れの特徴（その3）

「私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事を整理し、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。それには、その人が、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、その子どもたちは不品行を責められたり、反抗的であつたりしない信者であることが条件です。」

（テトスへの手紙5章5～6節）

教会の霊的リーダー（長老・執事・伝道者）の中でも、“長老”（＝“監督”）たちの存在はとくに重要で、次の聖書箇所が登場します。テモテへの手紙第一3章1～7節、テトスへの手紙1章5～9節、使徒の働き20章17～30節、テモテへの手紙第一5章17節、ペテロの手紙第一5章1～5節、テサロニケ人への手紙第一5章12～13節。

それらをまとめると、おおよそ以下ようになります。①その個人的な信仰における資質として、・自分の持っている信仰を公表できる。・この世の物ではなく神に頼っている。・彼の信仰は成長しており、他の者にも成長するように励まし、教えることができる。②その行ないについての資質として、安定した人生を送っている。・様々な状況に対応できる。・良い判断力を持ち、まわりの人が良い判断を下すための助けとなれる。③その家族の資質として、・彼の妻は信仰的であり、尊敬されている。・彼の子どもたちは、主を信じる者である。・彼は自分の家族を尊厳を持って治め、導くことができる。④その外部の人への評判として、・誠実で正直である。・他の人々に対していつも同じように接することができる。・信仰に堅く立つことを恐れない。

以上が各教会に複数いることが求められる“長老”の理想的な資質です。私たちは、ぜひ、そのような資質を目指す“長老”たちを、祈りをもって選任したいものです。

“キリストの教会”という群れの特徴（その2）

「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。」
（ローマ人への手紙 12 章 6～8 節）

前回に引き続き、〈御茶の水キリストの教会〉も、その群れの一つである「キリストの教会(無楽器派)」の特徴を見て参りましょう。今回はとくに、各教会の「キリストの身体なる教会」としての在り方について見てみたいと思います。

なお、上掲のみことばは、今年の年間聖句(⇒この紙面の最上段に掲載)に続く箇所になります。そこには、教会を構成する兄弟姉妹一人一人は、「与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、」それらを活かして、それぞれの役割や働きを果たすことが期待されております。つまり、身体の器官がその機能を果たすのと同じように、です。目であれば見る、耳であれば聴くというように・・・。

現実に、私たちの教会には、様々な役目や働きをする兄弟姉妹がおります。例えば、教会のために祈る者たち、教会のためにささげる者たち、教会堂のお掃除をする者たち、教会の『週報』や『今日の力』などに関わる者たち、礼拝で奉仕をする者たち、教会学校で子供たちを教える者たち等々、数え上げれば枚挙にいとまがありません。

そして、そんな「キリストの身体なる教会」の真のリーダーは、言うまでもなく、主イエス・キリストにほかなりません。さらに言えば、そんな主のもとに、教会には“長老”、“執事”、“伝道者”という霊的指導者たちが立てられているのです。

“キリストの教会”という群れの特徴（その1）

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」
(ローマ人への手紙 12 章 1～2 節)

<御茶の水キリストの教会>も、その群れの一つである「キリストの教会（無楽器派）」の特徴を説明するにあたっては、その礼拝の持ち方から説明するのが良いのではないのでしょうか？それは一言で言えば、聖書に示された礼拝の在り方を復元(=レストレーション)する試みと言えましょう。

具体的には、例えば、後代の所産でもある“教会暦”等には必ずしもとらわれておりません。また、聖書に直接記述のない「使徒信条」をはじめとする信条や信仰問答なども唱えない、ある意味、極めてシンプルな礼拝が行われています。

その一方で、良い意味でのこだわり(徹底)もあります。その最たるものが主の食卓、いわゆる聖餐を毎週欠かさず守ることでしょう。聖書に描かれた集まる度の実施に倣っている訳です。ある意味、他教派の諸教会がマンネリ化を避けるために頻度を減らしているのに対して、「キリストの教会」は聖書に忠実であることを選択したのです。

そして、特筆すべきもう一つのこだわりが、礼拝におけるア・カペラ讃美でしょう。新約聖書に登場する教会の礼拝に楽器使用が見当たらないことから、「聖書が黙しているところは、我々も黙す」の原則で、無伴奏・肉声による讃美を大切にしています。

キリストの教会

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」
(マタイの福音書 28 章 19 節～20 節)

いわゆるプロテスタント諸教会においては、マルチン・ルターやジャン・カルヴァンなど、その指導者たちのリーダーシップごとに教会は諸派乱立していました。そして、その事情は新大陸アメリカでも同じだったのです。

そんな中、19 世紀初頭のアメリカで、バートン・W・ストーン、トーマス・キャンベル、アレキサンダー・キャンベル、ウォルター・スコットといった者たちが聖書に示されているキリストの教え、教会の姿に立ち返り、キリスト者たちが一致することを願っていました。やがて、その願いは一つの運動となったのです。それが「聖書復帰運動(レストレーション・ムーブメント)」であり、現在はその先駆者の名前を冠して「ストーン＝キャンベル運動」とも呼ばれます。歴史的にみますと、(広い意味での)「キリストの教会」は、この運動の流れを汲むのです。

実は、少し複雑なのですが、上記の運動は比較的早くに分裂し、最も保守的な「キリストの教会(無楽器派)」、中間派と言われる「クリスチャン・チャーチ(有楽器派)」、そして、日本では日本基督教団に属している、ややリベラルな「ディサイプルス」に分かれて現在に至っています。ちなみに、<御茶の水キリストの教会>は、狭い意味では「キリストの教会(無楽器派)」の群れの一つです。なお、「無楽器派」とは、礼拝は是非、ア・カペラ(無楽器)で讃美しましょう、という傾向を意味しています。

教会(キリスト教)二千年の歴史

「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」

(使徒の働き 2 章 46～47 節)

今から約二千年前に誕生した<教会>は、上掲のみことばにも明らかなように、主にあつて日々、成長していきました。ちなみに、そんな最初期の<教会>のことを、歴史的には「初代教会」とか「原始教会」などと呼びます。

その後、<教会>は歴史的にも継続しますが、その二千年の歴史の半分にあたる紀元 11 世紀に様々な要因により大きく二つの宗派に分裂しました。「教会の東西分裂」という出来事がそれです。<教会>には、成長もあれば、分裂もあったのです。

そんな分裂により、西に陣取ったのがローマを中心とする「ローマ・カトリック教会」(いわゆる西方教会)。そして、東に陣取ったのが現トルコ最大の都市(かつてはギリシア)のイスタンブール(←コンスタンティノープル←ビザンティウム)を中心とする「東方正教会」(いわゆる東方教会)になります。なお、「ローマ・カトリック教会」の“カトリック”とは「普遍的な」という意味であり、「東方正教会」の“正”とは、「正統的な(オーソドックス)」を意味し、それぞれ自らの正統性を主張した訳です。

そんな「教会の東西分裂」から約五百年後、マルチン・ルターの宗教改革に端を発して、「ローマ・カトリック教会」からキリスト教(教会)の第三の宗派になる「プロテスタント諸教会」が登場することになります。ちなみに、「プロテスタント諸教会」の“プロテスタント”とは、カトリック教会側から付けられたニックネームで「抗議した者たち」という意味です。ちなみに、そこには無数の教会が諸派乱立していました。

教会とは何か？

「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような別れた舌が現われて、一人一人の上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が離させてくださるとおりに、他国のことばで話した。」

(使徒の働き 2 章 1~4 節)

今年 2023 年は、御茶の水キリストの教会・創立七十五年の節目に当たると同時に、四年に一度行われる教会の霊的なリーダーである長老たちの選任(更新)の年にも当たります。というわけで、秋に行なわれる教会全体会や長老選任まで、この一口レッスンでは、<教会>、ことに“キリストの教会”という群れについて、そして、そんな教会のリーダーである“長老”について、一緒に考えていきたいと思います。

さて、いわゆる<教会>とは、上掲のみことばで示される聖霊降臨(ペンテコステ)の出来事に始まるキリスト者の信仰共同体のことです。換言すれば、それは今年のテーマ「キリストの身体なる教会」です。ちなみに、<教会>のことを新約聖書の原語ギリシア語では“エクレシア”と言いますが、文字通りには「呼び出された者たち」という意味になります。つまり、<教会>とは決して建物のことではなく、キリストの名のもとにこの世から呼び出されたキリスト者たちの集まりのことを言う訳です。

仮に、サグラダ・ファミリアやノートルダム大寺院などのような立派な建物があつたとしましても、そこにキリスト者が存在せず、礼拝が行なわれていないとしたら、それは単なる「教会堂」に過ぎません。逆に、仮に立派な教会堂がなかったとしても、二、三人のキリスト者が礼拝を守っているとしたら、それは立派な<教会>なのです。

汝自身を知れ ～自分“自信”を生きる～

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」

(イザヤ書 43 章 4 節)

「汝自身を知れ」という名言は、ギリシアはデルフォイのアポロン神殿に刻まれている言葉で、ソクラテスに帰されたりもしますが、真偽の程は定かではありません。また、その意味に関しても諸説あります。

ある意味、私たち人間にとって、自分自身を知ろうとすることはそれなりに大切なことなのではないでしょうか？ともすると消極的になりがちな、自分の分を弁えるという面だけではなく、自分自身がどんな存在なのか、どれほどの価値を有するものなのかを知ることは有益でしょう。

そこで、私たち、神に創造された人間は、その創造主であられる神の視点から自分自身というものをまず捉える必要があるのではないのでしょうか？実は、私たち以上に私たちのことを知っている神は、上掲のみことばにありますように、私たち一人一人を「高価で尊い」存在、例えて言えば、世界をもその代わりにすることが出来るほどに大きな価値を持っている存在として、豊かに愛して下さっている、大切に下さっていると語っているのです。

ちなみに、上掲の聖句から、あの名言が生まれたとも言われます。すなわち、「一人一人の命の重さは地球よりも重い」という言葉です。・・・私たち一人一人は、地球よりも重い価値を持つ存在として、神に愛され、認められている存在として、もう少し、自分自身に、それこそ“自信”を持ってもいいのではないのでしょうか？

愛と赦しの「大みか体験」

「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」

(コロサイ人への手紙3章13～14節)

かつて宣教師たちの間に不穏な動きがあったと聞いたことがあります。御茶の水キリストの教会の創立に大きく関わったO.D. ビクスラー兄が、学園での働きを中心とする茨城での働きから撤退を余儀なくされた、いわゆる“ビクスラーおろし”と呼ばれた出来事です。どのような事情があったかについては諸説ありますので、控えます。

ただ、私がここで紹介したいのは、その後日談です。上述の不穏な動き、“ビクスラーおろし”の嵐が吹き荒れた十五年後に、学園を会場に開かれた極東宣教師ワークショップの際のことでした。その場には、おそらく極めて複雑な思いがあったと思いますが、東京の御茶の水キリストの教会や啓明学園に活動の拠点を移していたビクスラー兄も出席していました。そんな中、最後の全体会で発言を求めて立ち上がったのが、ジョーゼフ・L・キャノン兄です。“ビクスラーおろし”に関わった世代の一人として、彼はこう語りました。「過去の哀しい出来事、すなわち、ビクスラー兄追放運動を振り返り、私たちの思慮の行き届かなかったことを悔い改めます。心から悔い改めて、私はここでビクスラー兄に謝罪の意を表し、主にある交わりの回復を求めたいのです。」。それに対し、ビクスラー兄は言葉少なにキャノン兄の誠実な信仰に感動し、自ら手を差し伸べて握手を求め、二人は固い握手を交わしたというのです。後に、その場にいたハリー・ファックス兄は、この出来事を愛と赦しの「大みか体験」と呼んだのです。

未来は・・・年表の端にではなく、子供たちの中にこそある！

「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人ともに愛された。」
(ルカの福音書2章52節)

御茶の水キリストの教会では、この六月から、いわゆる教会学校(CS=Church School)を本格的に再開しております。対面のクラスを行ない、子供たちが戻りつつあります。ぜひ、そんな教会学校の働きを覚えて、お祈り下さい。そこに学ぶ子供たちのために、そして、働く教師たちのために・・・。

こんな言葉があります。「神なき知育は、知恵ある悪魔をつくることなり」。これは、教育学で知られる玉川大学のキャンパス内にある石碑に刻まれた言葉であり、玉川学園の創業者・小原國芳氏の強い思いが込められていると言われています。

ある意味、教会(学校)における教育にも通じるものがあるのではないのでしょうか。「鉄は熱いうちに打て」ではありませんが、幼いころから大切な聖書のみことばに基づきキリスト教教育の意義は強調し過ぎても強調し過ぎることはありません。なぜなら、教会に繋がる子供たちこそが今後、“世の光”、“地の塩”として地上における神の国(支配)の拡大にこそ関わり、主にあって未来の教会を支え、未来の教会で働くからです。

よく言われます。「一年先を考えるなら花を育てなさい。十年先を考えるなら木を育てなさい。そして、百年先を考えるなら人を育てなさい。」と。ぜひ、私たちは、私たちが生きている“今”だけを考えるのではなく、先のことを、そして、未来をこそ考えて行動したいものです。・・・なぜなら、未来は決して、年表の端にあるのではなく、子供たちの中にこそあるからです。主にあって、未来を育てましょう！

結果(結実)としての聖霊論

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」

(ガラテヤ人への手紙5章22～23節)

旧約聖書は「父なる神の時代」、新約聖書の時代は「子なる神イエス・キリストの時代」、そして、現代は「霊なる神・聖霊の時代」だと言われます。ただ、ある意味、最も受け止め方が難しいのが、“聖霊”なる神ではないでしょうか？ちなみに、福音主義の新約聖書学者・内田和彦師は「聖霊は過少評価してもいけないが、過大評価してもいけない」と言っています。意味深長ではないでしょうか？

実は、「(聖)霊」を意味するヘブライ語は“ルーアツァ”、そして、ギリシア語は“プネウマ”ですが、いずれも「霊」という意味と同時に、「風」や「息」という意味をも併せ持つ言葉です。ある意味、風が目に見えませんが、霊も目には見えません。ヨハネの福音書3章8節に次のようにある通りです。「風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」

確かに、風は目に見えませんが、しかしながら、風に揺らぐ葉っぱを見る時に、そこに風の存在や風の働きを確認することはできるのではないのでしょうか？同じように、目に見えない霊、ことに聖霊の働きも、その聖霊の働きの結果、聖霊が働いたことによる結実によって、確認・認識できるのではないかと思います。

私たち人間は、聖霊が働いた結果として、“御霊の実”が結ばれた、その結実として、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」が現われる時に、そこにこそ聖霊を感じ、聖霊の働きを確認することができるのではないのでしょうか？

困難な時こそ、小さなチャレンジを！

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを私たちは知っています。」
(ローマ人への手紙 8 章 28 節)

過日の週末は台風通過の影響で、いわゆる線状降水帯が発達し、各地に大きな被害と混乱を及ぼしました。実は、私自身も神戸に出張していたために、新幹線が動かずに足止めされ、夜遅くの帰着となりました。

しかしながら、困難の中にも、主なる神は万事を益とし、必要な備えを用意して下さることを学びました。・・・そんな足止めされた関西で、前々から一度訪れてみたいと思っていた世界遺産に行くことができたのです。クフ王のピラミッド、秦の始皇帝陵と並ぶ「世界三大墳墓」の一つ、仁徳天皇陵墓(最大の前方後円墳)です。

実は、ようやく夕方発の新幹線の切符が取れたものの、残された時間はわずか二時間半でした。普通に考えますと、かなり冒険なのですが、世界遺産に呼ばれているように勝手に思い込み、チャレンジしてみました。そうしますと、乗り継ぎもスムーズに行き、無事に、そして、有意義に見学を終えることができたのです。

ちなみに、当初、イライラして遠くの景色さえ眺めることもできない、うつむき加減の私でしたが、神はそんな私にこんなこともして下さいました。・・・うつむく私の至近距離に突然、人が立ちほだかったのです。迷惑だな、という思いで、顔を上げますと、その方のカバンが私の目に飛び込んできました。そこには英語でこう書いてありました。“Learn from yesterday. Live for today. Hope for tomorrow.” 直訳すれば、「昨日から学び、今日をこそ生き、明日のために希望を持ちなさい。」とでもなるでしょうか？そこで、私は今日を生きようと、小さなチャレンジをしたのです。

どこに目を留めるのか？

「私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。」
(詩篇 119 篇 18 節)

いよいよ六月、梅雨の季節です。雨も多く、湿度があり、いわゆる不快指数の高い日々が続くことになります。気持ちも滅入りがちではないでしょうか？ただ、「恵みの雨」という表現がありますように、雨もまた、私たちに必要な恵みであることをも前向きに覚えたいものです。

ワーズワースの言葉“April shower brings May flowers.”、直訳すれば「四月の長雨が五月の花々をもたらす」。日本の文脈で意識すれば、「六月の梅雨が八月のスイカをもたらす」とでもなるでしょうか？転じて、試練が後の祝福を運んで来る、という意味です。と同時に、雨が無ければ、花々も、スイカもあり得ませんので、この言葉はある意味、雨の必要性をも訴えているのではないのでしょうか？

こんな話があります。あるお婆さんには、二人の息子がいました。一人は傘屋で、一人は靴屋。ある日、雨が降っていました。するとお婆さんは「コマッタ、コマッタ」の連発です。近所の人が聞きます、「お婆さん、どうしたの？」。すると、お婆さんは言います。「こんなに雨が降ったら、靴屋の息子が儲からないよ」。・・・次の日は昨日までの雨が嘘のように晴れました。しかし、お婆さんはやはり「コマッタ、コマッタ」の連発です。また、近所の人聞きます。「お婆さん、一体、どうしたの？」。すると、お婆さんは言います、「こんなに晴れたら、傘屋の息子が儲からないよ」。

私たちの人生には、マイナスもあれば、必ずプラスもあります。どこに目を留めるか、が大切なのではないでしょうか？世界の「ホームラン王」ベーブルースは「三振王」でもありましたが、彼はそのホームランの数にこそ、目を留めたのです！

私たちが目指すべきは・・・キリストのような教会！

「私にとって、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

(ピリピ人への手紙1章21節)

本日(5/28)は、いわゆる教会暦で言うところの「ペンテコステ(聖霊降臨日)」に当たります。言うなれば、それは教会の誕生日です。西暦の数え方に誤差があるようですが、それをさて置けば、“教会”は創立2023年ということになるでしょうか？ちなみに、我らが「御茶の水キリストの教会」は今年、創立75年になります。

ところで、御茶の水キリストの教会の創立に大きく関わったO.D. ビクスラー兄は、単に、カギカッコ付の「キリストの教会」を求めているのではなく、まさに、自らが、そして、教会が、キリストのようになることを求めているのではないのでしょうか？そんなビクスラー兄のモットーは「クライスト・センタード(キリスト中心主義)」です。

おそらく聖書復帰運動の先駆者たちも、同じように、決してカギカッコ付の「キリストの教会」を求めているのではなく、まさに、自らが、そして、教会が、キリストのようになることを求めているのではないのでしょうか？

ならば、私たち御茶の水キリストの教会も、カギカッコ付きの「キリストの教会(Church of Christ)」というよりも、むしろ、「キリストのような教会(Church like Christ)」をこそ目指すべきでしょう。そして、それが本来の「キリストの教会」の目指すべきところなのではないのでしょうか？

パウロはなぜ、「生きることはキリスト」と言い、ビクスラー兄はなぜ、「クライスト・センタード」をモットーにしたのでしょうか？それは、彼らがキリストの愛をしっかりと感じていたからに他なりません。ゆえに、それに大いに応えようとしたのです。あたかも名医によって大病を克服した子がお医者さんになりたい、と言う如くに。

「心の貧しい」とは？

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

(マタイの福音書 5 章 3 節)

先日、学園の高等学校・中学校で行なわれている放送礼拝(全体で 8 分間、お話は正味 4 分弱)で、細川知正長老が学園総長として、こんなメッセージをして下さいました。「心の貧しい」を、以下のように分かり易く説明されたのです。 ※ 文責は野口

日本語のイメージですと「心の貧しい」とは、ともすると「卑屈である」とか「心が狭い」というようなネガティブな意味に捉えかねません。しかしながら、聖書的な表現としては、少し違ったニュアンス、より肯定的な意味があるのではないかと、いう訳です。すなわち、聖書的な意味での「心の貧しい」というのは、「必ずしも心がいっぱいいっぱいではない」、「心にそれなりの隙間や余裕がある」という意味だ、ということです。

「空腹は最良の調味料」などと言われますが、お腹がいっぱいであれば何を食べても美味しく感じないかもしれません。もう何も受け付けられません。しかしながら、空腹であれば、正直、何を食べても美味しく感じるのではないのでしょうか？まだまだ食べ物を受け付けられるはずです。・・・それとやや似たような意味で、私たちの心が自分自身の心配事や雑事などでいっぱいになり過ぎていますと、他の人の悩みを聴くどころではなくなってしまうのではないのでしょうか？逆に、主にあつて心の中が整理されており、そこに少しでも余裕があるのであれば、自分以外の方のことを心配したりする可能性が出て来るのではないかと思います。

「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」(ピリピ人への手紙 2 章 4 節)。願わくば、私たちは時に、少しでも「心を貧し」くしたいものです。ね。

あなたは御国の到来のために何ができるのか？

「御国が来ますように。」（マタイの福音書6章10節前半）

先日、茨城は水戸キリストの教会を会場にして行われた「キリストの教会・春季合同礼拝」には、久しぶりに対面でも多くの兄弟姉妹が参加し、良き学び、良き交わりの時となりました。

今回の合同礼拝の説教者は、学生時代に水戸キリストの教会で信仰生活を送った大阪聖書学院(=有楽器派の神学校)の学院長である岸本大樹兄でした。岸本兄は、上掲のみことばから、おおよそ次のように語られました。すなわち、御国=神の国とは、必ずしも、死後の天国のこと(だけ)を意味するのではなく、この地上における神の支配のこともである。そして、そんな神の支配は、主の導きのうちに私たち信仰共同体である“教会”が実現していくものである。もちろん、私たち“教会”には欠けも問題もあるが、それでもなお、みこころを求めて、「御国が来ますように」、つまり、地上でも神の支配が実現するように、でき得る最善を為し遂げていきたい・・・と。

かつて、あのジョン・F・ケネディがアメリカ大統領に就任した際、彼はアメリカ国民に向けてこう語ったそうです。「アメリカという国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたがアメリカという国のために何を為すことができるのかを問うて欲しい」。後に、ケネディ大統領の名言となった言葉です。

もちろん、この地上における神の支配としての御国=神の国は、私たちに對して素晴らしいことを成し遂げてくれるという面もあります。と同時に、私たちがそんな御国=神の国の建設、地上における神の支配の実現や拡大のために為すべきことがあるということも覚えたいと思います。・・・御国が自分のために何をしてくれるのかを問うだけでなく、自分が御国のために何を為すことができるのかを問いたいものです。

ゴールデン・ウィークは終わっても

ゴールデン・ルールは終わらない

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」（マタイの福音書7章12節）

大型連休“ゴールデン・ウィーク”がまもなく終わろうとしています。そして、その後にやって来ると言われるのが、いわゆる「五月病」です。

「五月病」とは、医学的な病名ではなく、五月の連休後に憂鬱になったり、体調が優れなかったり、学校や会社に行きたくなくなる鬱的な気分に見舞われる症状のことを言うようです。以前は大学の新生や新入社員など比較的若い人に見られる現象でしたが、昨今は転勤や転職、部署異動など、環境が変わったばかりの中高年にも増加傾向にあるようです。

ちなみに、しばらく前のことになりますが、五月に行なわれた義母の告別式が行われた斎場が思いのほか閑散としていたので、「この時期はお葬式が少ないのですか」と斎場の職員さんに聞いたところ、次のような答えが返ってきたことを思い出しています。「そりゃそうですよ、今は田植えの時期ですから・・・」。すなわち、お年寄りの方々も一家総出の田植えの時期は大いに必要とされているので、亡くなる人が少ないというのです。人は、為すべきことがある、必要とされている時に、より生き生きとなるのではないのでしょうか？

私たちキリスト者は、神の愛を知る者として、与える愛に生きることが大いに期待されているのではないのでしょうか？まさに、「主がお入用なのです」。ちなみに、与える愛の教えが説かれている上掲のみことばは、人呼んで“ゴールデン・ルール(黄金律)”。ゴールデン・ウィークは終わっても、そんなゴールデン・ルールは終わらないのです。

新緑と花々の季節に想う

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」（詩篇 19 篇 1 節）

「・・・野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、まして、あなたがたに、よくして下さらないわけがありません。・・・」
（マタイの福音書 6 章 28～30 節）

新緑や花々の大変美しい季節となりました。ぜひ、この季節、可能ならば、神様の創造されたみわざとしての自然をじっくり味わいたいものです。

ところで、黒板と言っても実際には深緑色だったり、青信号と言っても実際には緑色であるのは、基本的に緑色が目に優しい色だからだと聞いたことがあります。天地万物の創造主なる神様は、そんな目に優しい緑色を多用して世界や自然を創造して下さったのではないのでしょうか？

また、野の花々を美しく成長させて下さる神様は、花々以上に、私たち一人一人をも顧み、麗しく成長・成熟させて下さるというのです。「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい」（マタイ 6 章 31 節）と、主は言われます。

もちろん、私たちが何もしなくていい、ということではありません。それぞれにできることをさせていただきましょう。結果は神様にお委ねして・・・。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です」（第一コリント 3 章 6 節）。

主の手足は傷ついている !?

「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」 (ローマ人への手紙6章13節)

私が四十年前の青年時代によく歌ったゴスペル・フォークに「主の手足になろう」という歌がありました。歌詞は下記の通りです。

1. みんなで ともに祈ろう 日本の リバイバルを
主の心は 火でもえている みんなで もやされよう
※ おしみなく与えた主に おしみなくささげよう (2回)
2. みんなで 十字架をとろう 世界を 救うために
主のみ手は 傷ついている みんなで 主の手になろう
※ (くり返し)
3. みんなで 伝道しよう 福音を 満たすために
主の足は いたんでいる みんなで 主の足になろう
※ (くり返し)

ここで歌われておりますように、ある意味、主の御手、主の御足は、私たちの救いのためにこそ傷ついているのです。であれば、私たちキリスト者は、救われた者として、その救いの恵みに応えつつ、微力ながらも、キリストの傷ついた御手、傷ついた御足の代わりに、私たちの手、私たちの足を主なる神にこそおささげしようではありませんか？日本のリバイバルのために、主の働きのために・・・。

主なる神は、私たちの手、私たちの足を私たちの思いを越えて、尊く大きくお用い下さるのです。必要以上に躊躇せずにおささげしましょう。「主がお入用なのです！」

ファックス・ブラザーズ

「幻がなければ、民はほしいままにふるまう。しかし律法を守る者は幸いである。」
(箴言 29 章 18 節)

戦後の茨城で尊い働きをされた兄弟宣教師、人呼んで“ファックス・ブラザーズ”。先日、百歳にして天に召された弟ローガン・ファックス兄が夢とリーダーシップの人で、主に学園中心に働かれたのに対して、兄ハリー兄は愛と信仰の人で、学園での働きと共に、茨城のキリストの諸教会で尊い働きをなし、大きな影響を与えました。

弟ローガン兄は、茨城キリスト教学園の創立当初、学生・生徒たちを原野のようなキャンパスに連れ出しては、目をつぶらせて言いました。「ほら見えるだろう。素敵なおチャペル、立派な図書館、そして、林立する校舎群・・・」。その当時、現実には建物らしき建物はほぼ何もありませんでしたが、その七十年後の今、キャンパスを見回せば、ローガン兄の言った通りになっています。ローガン兄は若者たちに「学生・生徒よ、夢を抱け！」と言いたかったのではないのでしょうか？

一方、ハリー兄は、ある日、学園の聖書の授業の際に学生たちからこんな批判を浴びたそうです。「日本人が貧しい生活をしている中で、アメリカ人宣教師たちはいい洋服を着て、美味しい食事まで食べて、その上、車にまで乗っている。それで愛とは何事か!」。ハリー兄は全く言い返すことなく、うつむいたまま微動だにせず、その下にあった聖書には涙さえこぼれ落ちたと言います。・・・一週間後の授業になかなか現われなかったハリー兄はかなり遅れて、なんと自転車で学園に到着し、もんぺ姿でした。そして、お弁当はいわゆる日の丸弁当です。しかも、車は売却したとのことでした。なお。後日談として、学生たちは自分たちの言動を恥じて、ハリー兄に車を買戻してもらったそうです。みことばに忠実であろうとするハリー兄のお人柄が偲ばれます。

置かれた場所で咲きなさい！

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」
(箴言 3 章 6 節)

年度初めのこの時期は、環境が変わるといふ方も少なくないのではないのでしょうか？そして、往々にして、環境の変化は私たちに大いに不安にさせるものです。

そんな私たちに、聖書は「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ」と語り掛けます。仮に環境が変わったとしても、そこで天地万物の創造者にして、全知全能なる神を見上げ、絶対者である神の御手の働きを認めていくのであれば、主なる神は私たちの歩むべき道を「まっすぐにされる」(＝歩きやすくして下さる)というのです。

しばらく前にベストセラーになりました、シスター渡辺和子さんの『置かれた場所で咲きなさい』という本があります。その本の中でシスターは、「置かれた場所こそが今のあなたの居場所なのです。そこであなたなりの花を咲かせる努力をして下さい。仮に、どうしても咲けない雨の日や風の日、根を下に伸ばすことをしてみてください。やがて咲く花がより大きく、より美しくなるように・・・」と述べています。

置かれた場所で咲くということは決して、単なる諦めではありません。むしろ、より良い生き方の秘訣なのではないでしょうか？・・・こんな言葉があります。「過去と環境は変えられないが、未来と自分は変えられる」。であれば、私たちは変えられない環境を無理やりに変えようとするのではなく、置かれた場所、その与えられた環境で、主にあつてベストを尽くしつつ、自分なりの花を咲かせたいものです。

もしかすると、私たちは他の花々が気になってしまうことがあるかもしれません。しかしながら、必要以上に他の花々を意識せずに、主にこそ喜ばれる、世界に一つだけのあなたの花、私の花、オンリー・ワンの花を咲かせようではありませんか？

クオ・ヴァディス・ドミネ

～主よ、どこにおいでになるのですか？～

「シモン・ペテロがイエスに言った。『主よ。どこにおいでになるのですか。』
イエスは答えられた。『わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることが
できません。しかし後にはついて来ます。』」（ヨハネの福音書 13 章 36 節）

コンビニなどで使ったりするプリペイド・カードの一つに「QUO(クオ)
カード」があります。ちなみに、「QUO(クオ)カード」の「QUO(クオ)」は
元来、ラテン語で「どこに？」を意味する疑問詞であり、また、いわゆる関
係代名詞でもあります。なお、「QUO(クオ)カード」のホームページには、
ラテン語「QUO(クオ)」の用例として、上掲・ヨハネの福音書 13 章 36 節の
「主よ、どこにおいでになるのですか？(〔ラテン語〕クオ・ヴァディス・ドミ
ネ)」が引用されています。ペテロが主に問うた質問です。

実は、そんなペテロの問い「主よ、どこにおいでになるのですか？(〔ラテ
ン語〕クオ・ヴァディス・ドミネ)」は、ポーランド出身のノーベル文学賞作
家ヘンリック・シェンキェヴィチの代表作「クオ・ヴァディス」のタイトルに
ほぼそのまま使われています。

この歴史小説の中で、ペテロは未練を残しながらも、暴君ネロの迫害下の
ローマを離れるのですが、その途上、アッピア街道をローマに向かおうとす
る主イエスを見かけ、思わず問いかけます。「主よ、どこにおいでになるの
ですか？(〔ラテン語〕クオ・ヴァディス・ドミネ)」。すると主は、そんなペテ
ロに、「お前がローマを見捨てるなら、私はローマに行き、もう一度十字架
に架かる必要があるのだ」と答えたのでした。それを聞いたペテロは踵を返
して、ローマへと向かい、そこで主と同じ十字架では申し訳ないと、逆さ十
字架に架かる・・・そんなストーリーになっています。

私たちがまた、キリストを再度、十字架に向かわせてはいないでしょ
うか？

大事には一致を、小事には自由を、そして、全てには愛を！

「最後に申します。あなたがたはみな、心を一つにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。」

(ペテロの手紙第一 3 章 8 節)

私たち「御茶の水キリストの教会」は、より大きな目で見れば、“キリストの教会(Church of Christ)”という群れに属しています。歴史的には、「聖書復帰運動(Restoration Movement)」、昨今はその先駆者の名前から「ストーン＝キャンベル運動」と呼ばれる、19 世紀初頭にアメリカで起こった教会改革運動が発端になっていると言われていいます。その運動の初期の指導者たちには、バートン・W・ストーン、トーマス・キャンベル、アレキサンダー・キャンベル、ウォルター・スコットといった先駆者たちがいました。彼らは、聖書に示されているキリストの教えに立ち返ることによって、キリスト者たちが一つになることを希求したのです。

新大陸アメリカに乱立していたプロテスタント諸教会、例えば、長老教会、改革派教会、メソジスト教会、バプテスト教会などの有志のキリスト者が、主にある一致を目指しました。もちろん、諸教会間には様々な違いがあった訳ですが、それらを乗り越えて、紆余曲折あつと思いますが、一つになろうとしました。そこには現在の私たちの想像を絶する祈りや信仰の取り組みがあったのではないのでしょうか？

聖書に立ち返ることによって、主にある一致を目指した、そんな教会改革運動において、大切にされた精神があります。それが「大事には一致を、小事には自由を、そして、全てには愛を！」というものです。大枠では基本的な一致、主にある一致を目指しつつ、些細な部分ではそれぞれの自由をある程度許容し、そして、全ての点においてキリストの愛は決して欠かさない、という姿勢です。まさに今、多様性の時代における私たち「御茶の水キリストの教会」にも必要な精神なのではないのでしょうか？

みんなちがって、みんなたいせつ

「ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。・・・それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。・・・もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」

(コリント人への手紙第一 12 章 12、22、26 節)

今年の御茶の水キリストの教会の年間テーマは「キリストの身体なる教会」であり、その主題聖句はローマ人への手紙 12 章 4～5 節です。併せまして、ぜひ、上記で抜粋したコリント人への手紙第一 12 章 12～26 節もお読み下さい。「キリストの身体なる教会」のあり方がとてもよく示されています。

ちなみに、2023 年度の教会学校のテーマは、子供たちに分かり易いように「みんなちがって、みんなたいせつ」とさせていただきました。金子みすゞさんのあの有名な詩がその背景にあることは言うまでもありません。ただ、私たち人間は元来、罪人であり、必ずしも完全ではありません。ゆえに「みんないい」とは言い切れませんが、そんな私たち一人一人は、神の愛ゆえに「いい(良し)」とされた存在であり、それゆえに私たちは互いに赦し合い、愛し合い、受け入れ合っていきたいのです。

身体の器官には、それこそ多様性がありますが、それは決して優劣ではありません。そのことを私たちはしっかりと弁えたいと思うのです。ゆえに、御茶の水キリストの教会に、不要な存在は一人もおりません。「みんなちがって、みんなたいせつ」であり、「それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならない」ことを覚えましょう。・・・御茶の水“切り捨て”の教会にならないために！

ドアはどこにでもある

「そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、『主の山の上には備えがある。』と言い伝えられている。」

(創世記 22 章 14 節)

「・・・たたきなさい。そうすれば開かれます。」

(マタイの福音書 7 章 7 節後半)

先日、茨城キリスト教大学で行なわれた卒業記念礼拝の第二部で、卒業生で、現在、「キャミオ・コーヒー・カンパニー」というカフェでオーナー・バリスタをされている直井道姉妹が、後輩である今年度の卒業生に向けて、自分の経験から激励の講話をして下さいました。直井姉妹のアフリカはウガンダにおける海外青年協力隊時代の経験談から始めて、現在のお仕事をするに至るまでの道のりをスライド等を駆使して分かり易く説明して下さいました。そして、そこには多くの挫折や壁もあったのですが、それ以上に可能性の扉(ドア)が用意されていて、直井姉妹はそれらを一一つノックし、開いてきたと言います。

そんな直井姉妹の講話のタイトルは「どこでもドアではなくて・・・」というものでした。残念ながら、私たちの人生には、ドラえもんの“どこでもドア”のような便利なものはありません。しかしながら、そこには、私たちの思いをも越えた神様の備えの扉(ドア)がいくつもあるのではないのでしょうか？

主の山に備えあり！・・・神様は、直井姉妹に限らず、私たち一人一人にも備えの扉(ドア)を用意して下さいます。ぜひ、そのような扉(ドア)を、霊的な目を見開いて目ざとく見つけ、しっかりとノックして(たたいて)、開いていきたいものです。この年度末/初めは変化の時・・・あなたに備えられている扉(ドア)が必ずあるはずですよ。

“どこでもドア”はありません。でも、主にあつて、ドアはどこにでもあるのです！

夕暮れ時(夜)に始まる物語

「・・・夕暮れ時に、光がある。」（ゼカリヤ書 14 章 7 節後半）

聖書の物語は往々にして、夕方や夜から始まります。なお、ここで言う“物語”とは、決して「架空の物語」という意味ではありませんので、くれぐれも誤解のありませんように。

たとえば、マルコの福音書 4 章 35 節にはこうあります。「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸に渡ろう。』と言われた。」。このお話も夕方から始まっています。あるいは、マタイの福音書 14 章 25 節にはこうあります。「すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。」。このお話における大きな展開は夜も夜、夜中の三時に始まるのです。

もしかしたら、皆さんの中には、人生の“夕暮れ時”や人生の“夜”を感じている方がおられるかもしれません。年を重ねて、そう思っている方もいるかもしれませんし、あるいは、大きな試練の中、お先真っ暗という思いで、そう感じてしまっている方がいるかもしれません。

しかしながら、いずれの場合の“夕暮れ時”や“夜”であっても、《主の物語》は必ず始まるのです。上記で引用しました聖書箇所は、いずれもガラヤ湖での航海の場面ですが、そんな航海にはイエス・キリストが同船して下さっていたり、あるいは、イエス・キリストが近付いて来て、その船に乗り込んで下さっているのです。

あなたの“夕暮れ時”の航海にも、私の“夜”の航海にも、イエス・キリストは必ず同船して下さるのです。そして、私たちが自分という舟、教会という船に主が同船して下さっていることに気付く時、人生の航海における嵐は主によって凪へと変えられるのではないのでしょうか？・・・だから、夕暮れ時にも、希望の光があるのです！

小さいものを大きく用いられる主

「ギデオンは言った。『ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができますしょう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。』」
(士師記 6 章 15 節)

上掲の聖句は、ギデオンがイスラエルの民をミデヤン人の手から救い出すべく主の召しを受けた時の反応です。ギデオンは「私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若い」と、その小ささを大いにアピールしております。

しかしながら、現代の読者である私たちは、そんな一見小さなギデオンを、主なる神が大きく用いられ、かつ、まさに、少数精鋭で敵の大軍を打ち破られたという結末を知っているのではないのでしょうか？そう、主は、小さいものを大きくお使いになられるのです。

男性だけで五千人もいた大群衆の空腹を満たしたのは、一人の名もなき少年が際出したと思われる彼のお弁当、すなわち、たった“五つのパンと二匹の魚”でした。それを主は、少年や弟子たちの思いをはるかに超えて、大きく大きく用いられたのです。

私たちや私たちの賜物においても、同じことが言えるのではないのでしょうか？私たちが主の前に差し出す小さな私たち自身や私たちの賜物を、主はそれはそれは大きく用いて下さるのです。

讚美歌・第二編 26 番の歌詞(1 節)にある通りです。

「ちいさなかごに花をいれ、 さびしい人にあげたなら、
へやにかおり満ちあふれ、 くらい胸もはれるでしょう。

(おりかえし)

あいのわざはちいさくても、 かみのみ手がはたらいて、
なやみのおおい世のひとを あかるくきよくするでしょう。」

賜物は・・・出し惜しみせずに！

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」

(ペテロの手紙第一 4 章 10 節)

似て非なる言葉に「才能」と「賜物」があります。英語にすれば、いずれも“talent”だったりするのですが、私は主観も込めて、次のように使い分けております。

どちらかと言えば、「才能」は自分のものとして、自分の為のみ使うもの。時に、それはひけらかされます。ゆえに、「能ある鷹は爪を隠す」と戒められる訳です。

それに対して、「賜物」は“読んで字の如く”、恵みとして神から賜わったものであり、願わくば、それは自分の為のみならず、他者の為にこそ用いられるべきではないでしょうか？ちなみに、「賜物」は英語で“talent”に加えて、“gift”（贈物）と表現されることもあります。

さて、上掲の聖句で、使徒ペテロは、そんな賜物の「良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい」と勧めております。ことに、キリストを頭(かしら)とする、キリストの身体なる教会にあって、私たちキリスト者一人一人は、その一部として、その一器官として、自分に与えられている賜物を発揮して、それぞれの分(役割)を果たしつつ、互いに仕え合いたいものです。

自分の為だけに使う「才能」は、ある意味、「能ある鷹は爪を隠す」と言われますように、それなりに謙虚に隠してもよろしいかと思えます。しかしながら、神から賜わった恵みとしての「賜物」は、むしろ、決して出し惜しみすることなく、大いに分かち合うべきではないでしょうか？

もし、あなたが目ならその視力を、耳ならその聴力を、腕ならその腕力を、足ならその脚力や走力を、身体全体の為に、そして、主の為に存分に発揮致しましょう！

うまくいかない、が当たり前!?

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」
(ローマ人への手紙 8 章 28 節)

先日、閉幕したテニスの四大大会の一つ、全豪オープン車イスの部で、若干 16 歳で準優勝した小田凱人選手をご存知でしょうか？小田選手はあの車いすテニス界のレジェンドにして、世界ランキング一位のまま引退を表明した国枝慎吾選手にあこがれる、「ポスト国枝」の呼び声の高い、車いすテニス界のホープです。

小田選手は元々、プロ・サッカー選手になりたかったそうですが、九歳の時に骨肉腫を発症し、泣く泣くそれを断念。何度か再発などもあり、大いに苦しみ、挫折しますが、決して諦めることなく、最終的に今できることをやろうと、国枝選手を目標に車イス・テニスを始めたそうです。本人曰く、これは「神様からの挑戦」なんだと。

そんな小田凱人選手が先日、インタビューに答えている中で、こんなことを言っていました。「うまくいかないが、当たり前!」。・・・度重なる病気やその再発で夢が叶わず、思い通りに行かない中、むしろ、人生は「うまくいかないが、当たり前!」なのだという境地になり、そこから始めようと思ったというのです。

確かに、世界はあなたや私を中心に回っている訳ではありません。それゆえ、自分中心の天動説的な考え方から、むしろ、自分も含めて私たちは皆、神の回りを回っているのだという地動説的な考え方への転換こそが必要なのではないでしょうか？「うまくいかないが、当たり前!」。じゃそこから始めよう！という姿勢です。そのような心のコペルニクスの転回が、私たちの想定外を想定内にし、いじけからやる気へ、諦めから求めへ、挫折から再出発へと、私たちを突き動かしてくれるのです。

弱さのうちに立ち上がる！

「この後、イエスは出て行き、収税所にすわっているレビという取税人に目を留めて、『わたしについて来なさい。』と言われた。するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。」（ルカの福音書5章27～28節）

上掲の聖句は、レビ＝マタイの召命の記事です。主イエスは「収税所にすわっているレビ」に目を留め、呼びかけられました。この「すわっていた」という表現に、彼の“挫折”を観るのは読み込み過ぎでしょうか？しかしながら、主イエスの「わたしについて来なさい」との召しに「何もかも捨て、立ち上がって」従って行った彼の姿、さらには、その後(29節)に続く彼の大盤振る舞いは、彼が絶望の底になすすべなく座していたことを彷彿とさせます。ちなみに、レビ＝マタイが「立ち上がっ」という部分は、原語のギリシア語では“復活する”をも意味する“アナスタース”という言葉が使われているのです。これはある意味、主の召しによって、新たな使命に立ち上がったレビ＝マタイの復活劇なのではないでしょうか？

実は、聖書に登場する神に仕える人たちは、いずれもその弱さの中に神の召しを聴き、それに応えて立ち上がった人たちばかりなのです。・・・信仰の父アブラハムは高齢、行先不明、妻の不妊という三重苦ならぬ三重弱のうちに召し出されました。また、イスラエルの指導者モーセが神の召しを受けたのは、彼が弱みを握られて逃亡していたさ中であり、彼自身「口が重」かった、つまり、口下手を苦しめていた時でした。あるいは、預言者エレミヤはその若さという自信のなさと同様の只中に神の召しを聴きました。そして、使徒ペテロは一晚中漁をしても一匹も獲れなかった不漁と徒労、その挫折の現実の中に主の召しを受けたのです。その実例は枚挙に暇がありません。そう、私たちもその弱さのうちに神の召しを聴き、立ち上がるのであります！

呼ばれていませんか？

「私は、『だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。』とっておられる主の声を聞いたので、言った。『ここに、私がおります。私を遣わしてください。』
(イザヤ書6章8節)

今年の年間テーマは「キリストの身体なる教会」ですが、いわゆる「教会」のことを、新約聖書の原語ギリシア語では“エクレシア”と言います。その原意は「(神に)呼び出された者たち」。つまり、教会とは決して建物ではなく、キリスト者たちの集まりのことであり、何よりも、そこに集うキリスト者一人一人は神に呼び出されているのだ、ということになるでしょう。

しかも、私たち一人一人は、それぞれ文字通り、その「命」を「使」って与えられた“使命”を為すべく、神に呼び出され、召し出されているのです。讚美歌・第二編 83 番には次のようにあります。「①呼ばれています、いつも。聞こえていますか、いつも。はるかなとおい声だから、よい耳を、よい耳をもたなければ。③召されています、いつも。気づいていますか、いつも。はるかなけわしい道だから、よい足を、よい足をもたなければ。」

もちろん、私たちキリスト者は誰でも、広い意味で「地の塩」、「世の光」として福音を分かち合うべく遣わされるために、神に呼ばれ、召し出されていることは言うまでもありません。と同時に、もう一歩進んで、その生涯の中で一度は、“直接献身”、すなわち、献身して伝道者になる、福音宣教の働きに直接関わるということを考えてみてもよろしいのではないのでしょうか？

預言者イザヤにそう問いかけられた神は、あなたにも同じように問いかけられているかもしれません。「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と。

満を持す、「お茶飲まず」クリスチャン

「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上(のぼ)ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。」

(イザヤ書 40 章 31 節)

「満を持す」・・・『広辞苑』には「十分に準備を整えて、機会を待ち受けるようす」と説明され、注釈として『『満』は弓をいっぱい引きしぼることで、その状態を維持しつつ待ち構える意から』ともありました。

こんなお話があります。・・・ある中年のご婦人が初めて、教会の礼拝に出席しました。説教は難しく、教会もフレンドリーではなかったそうです。その教会を再訪する理由はほぼ見当たりませんでした。ところが、この女性は、その教会の礼拝に通い続け、やがて、救われて、クリスチャンになったのです。一体、なぜでしょうか？

後日、そのご婦人が救いの証しで分かち合ったことには、彼女をその教会の礼拝に踏み留まらせた理由が一つだけあったそうです。それは一人の老婦人の存在でした。その老婦人は高齡にもかかわらず、毎週日曜日、欠かさずその礼拝に出席し、いつも一番前の席に座って、笑顔を絶やさず、喜んで讚美し、うなずきながらみことばの説教を聴き、それはそれは礼拝を大切にしていたそうです。その姿を見た時に、このご婦人は、ここには何かがあると思ひ、その後、その教会の礼拝に通い続けたのでした。

ところで、そんな老婦人は若い頃からとても礼拝を大切にしていた姉妹で、毎週日曜日の礼拝をそれはそれは楽しみにしていました。礼拝が生きがだったのです。ですので、少しでも礼拝に出席し続けるために健康を維持することを心がけ、何よりも、土曜日の午後になると「断酒」ならぬ「断茶」までしたといひます。土曜日の午後からはお茶を飲まない、「お茶飲まず」クリスチャン!? まさに、「満を持して」教会の礼拝に臨んでいたのではないのでしょうか?・・・私たちもその姿勢に倣いたいものです!

主にあつて、一日一日を歩む

「だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」 (マタイの福音書 6 章 34 節)

英語で “Tomorrow is Another Day.” という言葉があります。「明日があるさ」とか「明日は明日の風が吹く」などと訳されることが多いのですが、ある中学生はこの言葉を次のように意識しました。「今日という日を精一杯生きる」と。つまり、明日は “Another Day”、すなわち、“別の日” になってしまうのだから、「今日」という日はかけがえのない日なのだ。ならば、まずは明日へ期待するよりも、「今日」という日を精一杯生きようではないか、ということなのではないでしょうか？

あの「アメイジング・グレイス」の作詞者で、元奴隷船の船長であった牧師ジョン・ニュートンは、その説教の中でこう語ったそうです。「人が一年に負う心労と面倒なことは、一束の薪にたとえることができる。これを一度に持ち上げるには重過ぎる。しかしながら、神はそんなことを我々にはさせないで、日毎に一本ずつ運べば良いようにして下さるのだ。にもかかわらず、我々はつい、昨日運んだものを再び今日の分に加えたり、さらには、明日の分まで運ぼうとして苦しむ。愚かなことではないか？」。

新しい年、2023 年は、まだ始まったばかりです。決して慌てることなく、簡単に諦めることなく、主にあつて、与えられた一日、一日をこそ、じっくりと歩ませていただきます。なぜなら、私たちは “明日” も “昨日” も生きることにはできないからです。確実に生きることができるのは、そう、“今日” だけです！

あの讚美 (聖歌 588 番 1 節) が聞こえてきませんか？・・・

「主と共に歩む その楽しさよ。主の踏みたまひし みあとをたどる。
(折り返し) ひと足 ひと足 主にすがりて。 たえず たえず われは進まん。」

《遮断》の必要性・・・繋がり過ぎ社会の中で

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」
(詩篇 46 篇 10 節)

「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならぬ。」
(出エジプト記 14 章 14 節)

私自身がアナログ人間で、スマホを持たず、LINE をしないからという訳ではないのですが、現代社会はつくづく「繋がり過ぎ」な社会だと思います。多くの方々が facebook や Twitter、LINE などの、いわゆる SNS を介して、場合によっては過剰に繋がっているのではないのでしょうか？

もちろん、このコロナ禍においては、それらが功を奏している面も多々あるでしょう。しかしながら、その一方で、もしかしたら、facebook の face が「顔」という意味と同時に「表面」という意味がありますように、やや「表面的」な繋がりになってしまっていないのでしょうか？そして、時に、その繋がりがかえってストレスになることがあるようにも思います。過剰に応答を気にしてしまうことはないのでしょうか？

そのような意味において、私たちは時に、いい意味でも悪い意味でも、そういう人間的な繋がり(SNS)を一旦、《遮断》して、積極的な意味で、一人になり、むしろ、私たちの主なる神とこそ繋がりたいと思います。上掲のみことばの如くに・・・

ぜひ、静まって、“祈り”という LINE で神と繋がり、私たちの思いの丈を余すところなく、誰にも個人情報漏らすことのない主にこそツイートしたいと思います。そんな一日一日の積み重ねが、やがて、私たちの『信仰の本(faith-book)』を出版してくれることでしょうか。それをいつか、天の御国でじっくりと読み返したいものです。

「キリストの身体なる教会」(2023年・年間テーマ)

「一つのからだには多くの器官があつて、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」

(ローマ人への手紙 12章 4～5節 [2023年・年間聖句])

ハレルヤ！主にあつて、明けましておめでとうございます。今年もどうぞ、よろしく願い致します。

さて、今年2023年は、様々な意味で“節目”の年になるのではないのでしょうか？まず第一に、三年間も続いたコロナ禍は今もなお継続していますし、最大限の注意が必要とされることは変わりませんが、いろいろな意味で新しい対処の仕方が始まっているのも事実です。コロナ禍における教会の新しいあり方を共に模索いたしましょう。

また、今年2023年は、1948年を起点とする私たち「御茶の水キリストの教会」の創立七十五周年に当たります。欧米では25年(クォーター[四分の一])ずつの区切り方もあり、今年は教会創立、四分の三世紀になる訳です。私たちの群れである“キリストの教会”の目指すところを改めて、ご一緒に考えてみましょう。

そして、今年2023年は、四年に一度行われる、教会の霊的なリーダーである長老選挙開催の年でもあります。この機会に「長老とは何(どういう存在)か」ということを学びつつ、御茶の水のこれからの四年間を霊的にリードする長老たちを、教会を挙げて選出いたしましょう。

そういう訳で、今年2023年は、上掲の聖句・ローマ人への手紙12章4～5節を年間聖句に「キリストの身体なる教会」をテーマに掲げ、私たち御茶の水“キリストの教会”の多様性を理解しつつ、主にある一致をこそ求めて参りましょう。その究極の頭(かしら)がキリストであることを弁え、クライスト・センタードで行きましょう！